

明日の研究者への期待

日本中世史・近世史、絵画史料学、歴史図像学、歴史地理学などなど、幅広い分野で活躍される黒田日出男教授を訪ねて。

日本史研究者として幅広い分野で活躍されている史料編さん所附属画像史料解析センターの黒田日出男教授の近著『日本中世荘園絵図の解釈学』（2000年7月）には、教授の専攻が「日本中世史・近世史、絵画史料学、歴史図像学、歴史地理学」と紹介されている。ずいぶんと欲張りな専攻である。今回のインタビューでは、この欲張りな専攻の系譜を聞き、明日の研究者への期待を語っていただいた。

竜への想い

いま最も熱中している研究テーマは竜です。中世の人々がどういう風に国土を意識していたのかを、竜を通して考えてみたい。むかし金沢文庫所蔵のある絵図をみて、この着想を得ました。それと同じ様な絵図をここに掲げました。竜神信仰が全国各地にあります。たとえば竜穴のこと。竜穴には竜が棲んでいて、それぞれの穴が地底で繋がっている。中世の人々は日本の大地は穴だらけで、竜が穴を行き来していると考えていたのではないかと。そして海の中には竜宮がある。竜伝説もあります。中世の人々は、神が竜の姿をとって戦争を勝利に導くと考えていました。日本の大地を支えたり、大地を穴だらけにして動き回っている巨大な竜たちの世界が日本である、と考えていたのかも知れない。近世に出回る地震の原因としてのナマズ絵も、もともとは竜でありました。右の絵図を見て下さい。竜の頭にある石に「かしまのかなめいし」と書かれています。



大日本地震之図

歴史図像学的研究へのプロセス

もともとは中世の開発史が専攻です。戦後の歴史学は発展史観を基本にした理論研究が圧倒的でした。その中で歴史地理学的方法によって現地調査を積み重ね、丁寧に正確な歴史像を描くことから研究に入りました。「田遊び」に注目したのがこの頃です。中世の民衆運動、農業技術史、民俗史の全体像を表現する貴重な史料である「田遊び」の研究は、対象や方法の斬新さとそこから生み出された従来とは異なる歴史イメージのゆえに、ずいぶんと評価を受けました。

1972年に史料編さん所に入所して、近世初期を担当することになりました。近世史の最先端の方々から刺激されて、「国郡制」の実態とは何だろうと疑問を持ち、国絵図を調べることにしました。歴史図像学に対する関心は、同時平行的にありました。それを可能にしたのは、フルカラーで出版された『日本絵巻物全集』（角川書店）です。また、絵画史料のもつ可能性を存分に発揮できるテストケースとして、中世の身分制を最初に手がけました。当時の身分は可視的なものだったからです。雑学と独習が基本でした。絵画史料論をはじめにあっては、そのバックグラウンドとして、美術史（パノフスキー）、構造主義、文化記号論などの文献には目

を通しました。日本では山口昌男さんの仕事なども。

画像（絵画）史料分析から見えてくること

やはり中世の民衆意識がリアルに把握できるようになり、歴史の全体的把握に貢献できると思っています。ビジュアルなものを自在に駆使して、歴史叙述まで行ければいいなと。沈黙史料、絵画史料という新しい史料が増えたということではなく、それらの読み方によって、これまでの発言史料、文書史料の読み方が変わるということです。両者の相互作用が起爆剤になって、さらに深い史料の読みがもたらされるのではないのでしょうか。私の所属する画像史料解析センターには3つのデータベースがあり（<http://www.hiu-tokyo.ac.jp/gazo/gazo.html>）古文書、古記録を画像として扱えるようになりました。文献史料は読むものであるばかりではなく、画像データベースを通して見るものでもあるのです。絵巻物、絵図だけが画像史料だとはいえなくなってきています。

若い人への期待

まず自分の視点できちっと先行研究を読み込むというスタイルを作ってほしいですね。私はこれが研究の王道だと思っています。飛躍して、現実から切り離されたところで新しい議論が独創的に作られるということはほとんどありません。先行研究との緊張関係から、あらたな研究地帯が切り開かれます。

いまの若い人は独自のチャンネルをもって、似たような研究を進めている人々と交流しており、自然に専門分野を越境しています。私の場合はほとんどが独習でしたから、その点では大きな変化ですね。絵画史料でいえば、羨ましいのはいまの人が高精細な画像を利用できることです。ただ、若い方々には現実との緊張感から問題を発見するという力が弱くなって来ているような気がします。危機意識とか閉塞感をどう超えるか、ということについてまだ突破口を見いだしていないのではないかと、と思います。

インタビュー 中野実（東京大学史料室助教）



画像史料解析センター
ホームページ



黒田日出男教授

AEARU Student Camp in Tokyo



東アジア研究型大学協会の活動と 学生キャンプ2000

熱気あふれる相互交流

東アジア研究型大学協会(AEARU)は、東アジア地域(日本、韓国、中国、台湾、香港)の主要な研究型大学のフォーラムであり、1996年1月に設立されました。その目的は、教官および学生の交流、共通カリキュラムと単位互換、施設・情報・資料の共同利用、研究・開発に関する協力、特定課題に関する会議・討論の共同開催などを含む事業を実施するために、相互に関心の



分科会発表風景

ある分野を調査し、特定することとしています。東京大学は創立メンバーであり、現在17大学、日本からは筑波大学、東京工業大学、京都大学、大阪大学、東北大学が加盟しています。昨年10月に台湾大学で開催された総会で運賃総長が会長に選任されています。

学術的活動としては、ウェブテクノロジー、バイオテクノロジー、文化などに関するワークショップを、毎年8~10件ほど開催しています。

学生交流としては、学生キャンプを2件開催しており、同世代の若者が1週間ほど寝食を共にし、学術的なテーマから身近な問題について英語で話し合います。学生が国際的な経験を積むと共に、アジアに対する認識を高めるといって大きな効果があります。企画運営はすべて学生によって行われています。

今年の学生キャンプは、香港科学技術大学と東京大学が主催し、香港には本学から6学生が参加しました。「都市問題」をテーマとした東京のキャンプは、国立オリンピック記念青少年総合センターを宿舎としました。企画・運営は、昨年のキャンプ参加学生を核とした組織委員および協力者25名が担当し、大学紹介、都市問題に関する基調講演会、参加者の調査報告会、東京都水リサイクルセンターなどの見学会、大都会東京を体験するオリエンテーリング、体験と調査に基づく研究成果発表会などを実施しました。参加者は、各大学から2~4名推薦された優等生です。黒い髪と同じような顔、おそろいのTシャツを着た若者集団は、出身国を推定することすら困難です。英語を共通言語として、あちらこちらで会話が始まり、その熱気と疲れを知らないエネルギーは凄まじいものがありました。学生主体とは言うものの、事務局研究協力部国際交流課の支援が大きく、都市問題を専門とする教官が助言しました。

小谷俊介(おたに・しゅんすけ 大学院工学系研究科教授)



左 学生キャンプ最終日の夜(運賃総長を囲んで)
上 グループ毎に企画に参加する学生たち